2025 年度一般社団法人甲賀市国際交流協会事業報告

**概要**

甲賀市の外国人人口は過去 5 年間で 1127 人増加し、2026年3月末時点で 5,000 人に達しました。これは総人口の 5.78%で全国平均の3%を大きく上回っています。国籍としてはブラジルとベトナムの 2 か国で約60%、次いでフィリピン、ペルー、インドネシアと続きますが、近年ではミャンマー、ネパール、インドが増加、在留資格も就労資格とその家族の滞在資格が増加するなど多様化が進み、これまで以上に言葉、文化、制度、そして心の壁を原因とする課題が浮き彫りになっています。

当協会は 2005 年の設立当初から交流推進事業に取り組み、多文化共生社会の実現を目的とした、海外交流、国際教育、地域交流、日本語教室、日本語交流、子ども学習、国フェス等ボランティアによる活動を進めてきました。また、2024 年度からは市の委託を受けた多文化共生センター事業にも取り組み、2025 年は①生活支援②定住促進と雇用支援③コミュニティ支援④多文化防災の4本柱で甲賀市に在住する外国人住民の“普段のくらし”を支える事業を実施しました。様々な強みを持ったボランティア、地域や関係機関とのつながりが、より豊かで充実した交流推進事業と多文化共生センター事業の実現を可能にしました。

今後も社会発展に重要な多様性(ダイバーシティ)と包摂性(インクルージョン)の視点で人と人、地域と地域、甲賀市と世界をつなぎ、多文化共生の社会づくりと市民主体の国際交流活動にご支援賜りますようお願いを申し上げ、以下、2025 年度の事業等について報告させていただきます。

**事業別報告**

**(1)　交流推進事業**

**海外交流チーム**

(事業名)

市民交流(ミシガン州・利川市との海外交流活動)

中学生交流(派遣・受入)

(目的)

姉妹都市(米国ミシガン州 3 都市・韓国利川市)と海外交流活動を通して、

- 異文化に対する理解を深めると共に、自国の文化や地域社会について再認識する機会を創出する。
- 言語や生活習慣の違いを超えた交流を促進し、国際的視野と主体性を備えた人材の育成を図る。
- 相互訪問や市民・青少年交流を通じて、姉妹都市間の友好親善と相互理解を一層推進する。

(実施内容)

| 項目 | 事業名 | 内容 | 実施日 | 参加人数 |
|---|---|---|---|---|
| 市民交流 | ミシガン州<br>親善使節団受入 | 姉妹都市からの訪問団を受け入れ、歓迎昼食会・歓迎交流会の開催や市内観光、ホームステイを通じた市民交流を実施。 | 7 月 11 日～15 日 | 訪問団(8 名)<br>昼食会(30 名)<br>交流会(42 名)<br>合計 80 名 |
| | 韓国利川<br>市民訪問団派遣<br>文化交流団 | 利川市を訪問し、歓迎晩餐会への参加、文化施設視察、太鼓公演による文化交流および意見交換を実施。 | 8 月 29 日～<br>9 月 1 日 | 市民訪問団<br>(14 名)<br>すいりょう<br>太鼓団(6 名)<br>合計 20 名 |
| | 姉妹都市フェスタ | 姉妹都市紹介ブースの設営・展示を行い、市民への国際交流活 | 2 月 23 日 | 約 200 名 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 動の周知・啓発を実施。 | | |
| 中学生交流 | 利川市派遣 | 甲賀市市民活動推進課多文化共生推進室と連携した派遣に関するサポート | 9 月 6 日～10 日 | 生徒 5 名 |
| | ミシガン州派遣 | | 11 月 7 日～15 日 | 生徒 10 名 |
| | 利川市受入 | | 11 月 29 日～<br>12 月 3 日 | 生徒 6 名 |
| | ミシガン州受入 | | 1 月 23 日～30 日 | 生徒 10 名 |

（成果）

- ミシガン州友好親善使節団受入の際、協会と甲賀市市民活動推進課多文化共生推進室が連携し、歓迎昼食会やフェアウェルパーティーにおいて、工夫を凝らした「おもてなし」を実施することができた。
- 今年度も中学生交流事業において、「米国・ミシガン州への派遣および受入」「韓国・利川市への派遣および受入」のすべてを実施することができた。
- 昨年度の「甲賀市制施行 20 周年記念式典」における日韓文化交流友好親善公演を契機として、今年度は利川市で開催された「伝統文化遺産風流」において、「小佐治すいりょう太鼓」による交流公演が実現し、6 名が参加するなど、相互の文化交流を一層深めることができた。

（課題と今後必要な取組）

- 姉妹都市との交流について、市民に広く知っていただき、より多くの方に参画していただく。
- 姉妹都市協定に基づき、文化に加えて産業・経済・観光分野などに関する組織・団体や甲賀市の担当部署と連携強化が必要である。
- 海外交流チームのメンバー固定化・高齢化が進んでおり、体制の見直しが課題である。

ミシガン州親善使節団受入

熱演する小佐治すいりょう太鼓文化交流団決起表明、熱くなった歓迎会

（事業名）

**「甲賀市の姉妹都市交流の歴史を紐解く」の発行**

（目的）

2005 年から町単位で始まった姉妹都市（米国ミシガン州 3 都市・韓国利川市）交流の歴史を編纂し、これまで関わってきた人、今後交流に関わる人に読んでほしい資料として提供する。

（実施内容）
4年にわたり海外交流に関わってきたボランティアが、協会の事業として、旧町から提供された資料や個人の記録をもとに、編纂した。内容は、ミシガン州のトラバースシティ市、デウイット市、マーシャル市、韓国の利川市との初期からの交流のようすを記載している。

（成果）
相手国の人々との考え方や暮らし方、社会課題の取り組みなど学んできたことを大切にしながら、これからの社会、人生のあり方を考える機会となる。

**国際教育チーム**

（事業名）
小学生向け「世界まなびじゅく」「ハロウィンパーティー」
一般向け「大人の世界まなびじゅく」

（目的）
- 韓国の利川市との交流について、従来の一時的・広域的な交流から学校単位での継続的な交流へと発展させることで、より深い国際交流を推進する。
- 「世界まなび塾」事業を地域の多文化共生事業と連携させることで、地域住民（大人・子ども双方）の国際理解を高め、地域における多文化共生と交流の促進を図る。

（実施内容）

| 事業名 | 内容 | 実施日 | 参加人数 |
|---|---|---|---|
| 「小学生対象世界まなびじゅく」1 回目 | 韓国利川市と小原小学校のオンライン交流会とフラットキッズプロジェクト | 7 月～12 月 | 小原小学校(11 名)<br>新屯小学校(12 名)<br>合計 23 名 |
| 「小学生対象世界まなびじゅく」2 回目 | 地域の多文化共生事業に連携して「みなくる WAIWAI フェスタ」でベトナム春巻体験教室とミニ講座 | 7 月 26 日 | 39 名 |
| ハロウィンパーティー | 約 110 名の小学生が参加。多国籍のゲストと仮装やゲームを楽しみながら異文化交流を行い、“TrickorTreat!!”の声とともに笑顔あふれるイベント | 10 月 26 日 | 110 名 |
| 「小学生対象世界まなびじゅく」3 回目 | モンゴル編 | 2 月 15 日 | 19 名 |
| 大人の世界まなびじゅく | 水口「はればれ会」と連携したベトナム講座 | 2 月 13 日 | 31 名 |

（成果）
- 利川市との交流を学校間交流へ移行したことで、同年代の児童同士が共通テーマで発表し合うなど、交流内容の充実が図られた。
- 継続的なオンライン交流や手紙交換を通じて、児童同士に 1 対 1 の友人関係が生まれ、相互理解の深化が見られた。
- 現地担当者や保護者からも高い評価を得ており、事業の意義が確認された。
- 多文化共生事業と連携して実施したことで、地域ニーズに即した交流が可能となり、参加者の国籍・年齢層が拡大した。地域団体や参加者からは継続開催や内容拡充を望む声が寄せられ、多文化理解への関心の高まりが確認できた。
- 「ハロウィンパーティー」や「世界まなび塾」では、外国籍住民との交流や体験を通じて、児童および保護者の国際理解が促進され、大人も含めた学びの場としての効果が見られた。

（課題と次年度の方針・取組）
- 学校間交流の実施にあたっては、学校側の負担軽減に配慮してきたものの、担当教員の業務負担や年間計画への位置付け、インターネット接続環境の整備などに課題があることが明らかとなった。また、学校間交流や地域連携型事業への移行により、全小学生が異文化に触れる機会が限定的（年 1 回）となっている点

も課題である。さらに、保護者や地域からは開催回数の増加を望む声があり、ニーズへの対応も求められている。

- 韓国・利川市との学校間交流は、担当校の変更があっても継続し、安定的な実施体制の構築を目指す。また、地域の多文化共生事業との連携も引き続き推進し、地域における国際理解の促進を図る。
- 小学生および一般向け講座については、学校や地域に出向いて実施できる「出前講座」としてメニュー化を進め、より多くの市民が参加できる機会の拡充を図る。あわせて、異文化理解の機会についても、可能な範囲で回数の増加を検討していく。

| 小原小学校と新屯小学校オンライン交流会 | みなくる WAIWAI フェスタで<br>ベトナム春巻体験教室とミニ講座 |
|---|---|
| | |
| ハロウィンパーティー | 小学生まなびじゅく「モンゴル編」 |
| | |

**日本語交流チーム**

（事業名）
やさつなまちあるき大池寺へ行こう
やさつな料理教室カップ寿司をつくろう

（目的）

- 日本語に不安のある外国人でも安心して参加できる場を提供するとともに、日本語教室以外でも日本語で交流できる機会を創出し、参加者同士のつながりを深める。
- 「やさしい日本語」を用いて日本文化や地域の魅力を伝え、国際理解と地域への関心の向上を図る。

（実施内容）

| 活動名 | 内容 | 実施日 | 参加人数 | 参加者の国籍 |
|---|---|---|---|---|
| やさつなまちあるき<br>大池寺へ行こう | 大池寺への散策<br>地元の名物（お茶やお菓子）を楽しむ | 6 月 8 日 | 28 名 | インドネシア、バングラディシュ、南アフリカ、ベトナム、フィリピン、ブラジル、アメリカ、インド、日本 |
| やさつな料理教室<br>カップ寿司をつくろう | 日本の寿司文化について学ぶカップ寿司を作る | 2 月 15 日 | 18 名 | インドネシア、ベトナム、ブラジル、ペルー、アメリカ、日本 |

（成果）

- 地元の名所や名物に触れる機会を通して、参加者が地域への理解を深め、自身の住む地域への愛着の向上が見られた。また、日本の寿司文化について学ぶことで、回転寿司や市販品にとどまらない多様な「寿司」への関心が高まった。
- ウォーキングや調理といった体験型活動を取り入れたことで、参加者同士の自然な会話が生まれ、交流の深化につながった。家族連れの参加者からは、地域活動が家族のふれあいの機会となったとの声もあり、世代を超えた交流の場としての効果も確認された。
- 国籍の異なる参加者同士が協力しながら調理を行う場面も見られ、言語や文化の違いを越えた相互理解と交流が促進された。こうした体験を通じて、多文化共生への意識醸成に寄与する成果が得られた。

（課題と次年度の方針・取組）

- これまでの活動では、他団体との連携が十分に図れず、活動の広がりに限りがあった。また、広報についても日本語教室や学習支援教室の参加者に限定されており、より多くの外国人住民へ情報が届いていない点が課題である。
- チームのスローガンである「やさしい日本語でつながる」を軸に、多様な人々が参加しやすい環境づくりと交流の促進を目指す。
- 他団体との連携を強化し、その関係者にも「やさしい日本語」の理解と活用を広げていく。

| やさつなまちあるき大池寺へ行こう | |
|---|---|
| | |

| やさつな料理教室カップ寿司をつくろう | |
|---|---|
| | |

**地域交流チーム**

（事業名）

2025 ネイチャー体験事業、地域交流支援事業・地域活動支援事業、年末炊き出し事業

（目的）

- 地域で生活する外国人と日本人が、交流事業やイベントを通して相互理解を深める
- つながりや助け合いが生まれる地域づくりを目指し、その実現に向けて 4 つの事業に取り組む。

（実施内容）

| 事業名 | 内容 | 実施日 | 参加人数 |
|---|---|---|---|
| 2025 ネイチャー体験事業 | 水口町松尾にある里山元気会のフィールドにおいて、同会メンバーの協力のもと、多国籍の子どもたちが林間ロープウェイやボルダリングなどの自然体験活動を行う。また、火起こしやザリガニ釣り、かまどご飯によるおにぎりづくりなど、里山ならではの体験を通して交流を深める。 | 11 月 16 日 | 61 名 |
| 年末炊き出し事業 | 水口町新城の「スポットライフいろは」において、恒例となっている年末の炊き出しを実施し、地域住民や外国人住民が交流できる機会を創出。 | 12 月 30 日 | 250 名 |

（成果）

- ネイチャー体験事業は、回を重ねるごとに内容の改善が図られ、スタッフの負担軽減に配慮しつつ、安全性の確保や待ち時間の短縮にもつなげることができた。その結果、参加者にとって充実した一日となり、事業を通じて協会の活動を広く周知する機会ともなった。
- 子どもたちからは「もっとブランコをしたい」「火おこしを最後までやりたい」といった声や涙を見せる場面もあり、体験への強い関心と意欲がうかがえた。こうした姿から、本事業が子どもたちの成長に寄与し、将来的な共生意識の醸成にもつながる可能性を感じることができた。
- 活動を通してルールを守ることの大切さについても実感され、幼少期からの継続的な教育の重要性が改めて認識された。

（課題と次年度の方針・取組）

- 今年度は 2 つの事業において助成金が不執行となる状況があり、事業運営における体制や調整面での課題が見られた。今後はチーム内での役割分担を明確にし、組織全体として計画的に事業へ取り組む体制づくりが必要である。
- 年末炊き出し事業は外国人参加者と地域住民が交流できる貴重な機会であるものの、協会の関与や役割をより明確にし、地域とのつながりを深める仕組みづくりが求められる。
- 助成金の減額はあるものの、地域交流支援事業は今年度と同様に継続して実施する。チーム内の連携を強化し、決定した事業に組織として着実に取り組む体制を整える。
- 年末炊き出し事業への積極的な参画を通じて、協会が地域と外国人住民をつなぐパイプ役としての機能を果たしていく。
- 地域交流支援事業における助成対象者の開拓を進め、事業の拡充と地域とのつながり強化を図る。

| やめられないキックブランコ | みんなで現地でつくった秋 |
|---|---|
| | |

| かまどごはん最高 | 希望ケ丘ポットラック |
| --- | --- |
| | |

**日本語教室**

協会では、「日本語教室虹」と「にんじゃ日本語教室」の 2 つのグループが活動しており、それぞれ受講者一人ひとりのニーズにできる限り寄り添った教室運営を行っている。外国人市民が地域社会で安心・安全に生活できるよう支援することを目的とし、仕事に必要な日本語の習得や、各自の目的に応じた多様な学習機会を提供している。

（事業名）

**日本語教室虹**

（目的）

日本語を母語としない人への日本語学習支援

（実施内容）

| 事業名 | 内容 | 実施日 | 参加人数 | 合計 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 前期 12 回 | 月曜教室 | 4 月 7 日～7 月 14 日 | のべ 88 名 | 742 名 |
| 後期 12 回 | 月曜教室 | 9 月 1 日～12 月 15 日 | のべ 97 名 | |
| 前期 | 個別教室 | 4 月 1 日～3 月 31 日 | のべ 223 名 | |
| 後期 | | | のべ 196 名 | |
| 冬期 | | | のべ 138 名 | |
| 学習者とボランティアの交流会 | | 7 月 21 日 | 22 名 | 45 名 |
| | | 11 月 24 日 | 23 名 | |
| 学習者のインタビュー | | 4 月 1 日～3 月 31 日 | 46 名 | 46 名 |
| ボランティア | 学習会 | 4 月 1 日～3 月 31 日 | 15 名 | 32 名 |
| | スキルアップ講座受講 | 2 月 7 日 | 12 名 | |
| | みなくる WAIWAI フェスタ教室紹介展示 | 7 月 26 日 | 5 名 | |

（成果）

- 学習希望者が多く、クラス分けには苦慮したものの、可能な限り個々の希望に応じた学習機会を提供することができた。
- 交流会の実施により、ボランティア同士および学習者との交流が深まり、学習者に対して日本文化を紹介する機会ともなった。さらに、学習会を継続して実施する中で、指導の導入方法について実践的に検証し、一定の効果を得ることができた。
- フェスタへの参加を通して日本語教室の活動を広く周知することができ、認知向上につながった。運営面では、倉庫にロッカーが設置され合鍵の貸与を受けたことで、教材管理や準備の利便性が向上した。

（課題と次年度の方針・取組）

- インタビュー実施方法については、募集時期の調整や柔軟な個別対応の仕組みを整備し、効率的かつ混乱の少ない運営体制を構築する必要がある。
- 個別指導に対応できるボランティアの育成を進め、受け入れ体制の強化を図る。
- 学習効果を高めるための実施回数や内容の見直しを検討し、継続的な学習機会の確保に努める。

| 学習に夢中 | 教室の様子 |
| --- | --- |
| | |
| 広がる学習者のニーズに応えて | 展示品作成 |
| | |

（事業名）
**にんじゃ日本語教室**
（目的）
外国人住民の日本語学習支援、日本語学習支援を通して生まれる交流促進

（実施内容）

| 項目 | 内容 | 実施日 | 参加人数 | 合計 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 前期 10 回 | 土曜教室 | 4 月 5 日～8 月 2 日 | 35 名×10 回 | 350 名(延べ) |
| 後期 10 回 | | 8 月 30 日～12 月 13 日 | 45 名×10 回 | 450 名(延べ) |
| ボランティア | スタッフ会議 | 8 月 9 日 | 13 名 | 38 名 |
| | 平和堂イベント | 9 月 2 日 | 5 名 | |
| | 国フェス(生徒合唱) | 10 月 12 日 | 20 名 | |

参加学習者の国籍：インドネシア、ベトナム、ペルー、ブラジル、タイ、インド、アメリカ、フィリピン、ネパール、ミャンマー

（成果）
- 日本語教室への参加を通じて、学習者同士が国籍を越えてつながり、情報交換を行うなど、交流の広がりが見られた。こうしたつながりは、学習意欲の向上や安心感の醸成にも寄与している。
- テキストを用いた学習が初めての参加者にとっても、具体的な文法ルールを理解する機会となり、日本語学習の基礎力向上につながった。さらに、「こうか日本語教室」の初級修了者の受け入れ先としての役割も果たし、継続的な学習機会の提供に寄与した。
- 学習希望者や申込者が増加しており、事業へのニーズの高さが確認された。学習者は日本での生活や地域情報への理解を深めており、教室内にとどまらず、地域や他の活動団体とのつながりを築きながら主体的に活躍する様子も見られた。

（課題と次年度の方針・取組）

- 年間（前期 10 回・後期 10 回）での計画的な運営を想定しているものの、随時の学習希望者が多く、受け入れに伴うクラス編成の変更が必要となるなど、運営の安定化に課題が見られた。
- クラス内での学習者のレベル差が大きく、指導がボランティア個々の力量に依存する場面が多かった。そのため、指導力の差によるクラス毎の学習内容や進め方等にはばらつきがあった。
- ボランティアのスキルアップを目的とした勉強会を十分に実施できておらず、指導力向上の機会が不足している点も課題である。
- 隔週土曜日という開催頻度では学習の進度が遅くなりやすく、継続的な学習効果の面で改善の必要性が感じられた。

| つながる学習者 | 熱心に学ぶ学習者 |
|---|---|
| | |
| 楽しい学習交流会 | 学習機器を使った教材で学ぶ |
| | |

（事業名）

**こども学習**

（目的）

外国につながる児童生徒に対し、ボランティアによる学習支援の場を設け、学校の宿題や学習面での困りごとに対応する機会を提供する。また、高校進学等の進路支援を行い、将来の可能性を広げるとともに、地域社会で活躍できる人材の育成につなげる。あわせて、安心して相談できる場や居場所としての機能も担うことを目指す。

（実施内容）

| 活動名 | 内容 | 実施日 | 参加者数 | 内訳 |
|---|---|---|---|---|
| 「こども学習会」 | 午後2時から4時までの2時間開催し、学校での学習の復習や宿題、入試勉強等への支援を行った。<br>基本的には小学生・中学生を対象としているが本学習会の卒業生で高校へ進学した生徒の支援も一部で行った。 | 毎週土曜日<br>年間40回 | 子ども<br>延べ147名<br><br>ボランティア<br>延べ210名 | 学年<br>小学生14名<br>中学生8名<br>高校生2名<br>国籍<br>ブラジル10名<br>ペルー12名<br>中国1名<br>フィリピン1名 |

（成果）

- 長期休業中の課題や日々の宿題の支援を通して、子どもたちが安心して通学や学習に取り組める環境づくりにつながった。また、高校進学に向けた支援も行い、将来の進路選択に寄与することができた。
- 外国人保護者の困りごとにも寄り添い、家庭面も含めた支援を行うことができた。支援にあたるボランティア同士では、情報交換や協働を通じて一体感が生まれ、円滑な運営につながっている。
- ボランティアの職歴や立場が多様であることから、活動自体が交流の場としても機能している。参加する子どもたちも出身や学校、学年がさまざまであり、互いに刺激を受けながら交流を深める機会となっている。

（課題と次年度の方針・取組）

- 子ども・ボランティアともに自由参加を基本としているため、参加人数を事前に確定することが難しく、毎回の運営が安定しにくい状況にある。
- ボランティアについては、進学・就職や家庭環境の変化により継続が難しくなるケースも多く、安定的な人員確保が課題となっている。
- これまでの柔軟な参加形態を維持しつつ、運営の安定化に向けた工夫を行うとともに、継続的に活動できる体制づくりを進める。
- より多くのボランティアを確保し、支援対象となる子どもたちの受け入れ拡大と支援の充実を図る。近隣の高等学校や県内の大学に対してボランティア募集の呼びかけを行い、新たな担い手の確保につなげる。

| 漢字の学習は楽しい | わかるかな |
|---|---|
| | |
| 一人ひとり丁寧に | わからない所は聞こう |
| | |

（事業名）

**国際交流フェスタ**

（目的）

- 地域に暮らす外国人住民と日本人住民が、互いの文化や価値観を尊重し合いながら交流し、共に支え合う多文化共生社会の実現を目指す。
- 市民一人ひとりが多様性への理解を深め、地域社会の一員としてのつながりを実感できる機会を提供する。

（実施内容）

みなくるプラザの開催は初めて、雨天にもかかわらず約 800 名以上が来場し、立ち見が出るほどの盛況となった。

会場は多文化交流の雰囲気に包まれ、幅広い世代が参加し一体感のある空間が生まれた。食・体験・相談・展示・ステージの各プログラムを通じて、異文化理解と交流が促進され、在住外国人への支援や多文化共生への関心向上にもつながった。全体として、地域のつながりと多文化共生の広がりを実感できる事業となった。

（成果）

- 外国人住民と日本人住民が食やステージ企画、交流活動を通じて互いの文化や価値観に触れ合う機会を創出し、多文化共生への理解促進につなげることができた。ステージプログラムやファッションショーでは、多様な文化の魅力を発信することで、参加者が異文化を身近に感じ、相互理解を深める場となった。
- 出展者・ボランティア・協力団体が連携し、通訳支援を含めた円滑な運営体制を整えたことで、外国人参加者も安心して参加できる環境を実現した。関係者が協力し合いながら事業を進めたことは、「共に支え合う地域づくり」という目的にもつながった。
- 雨天にもかかわらず多くの来場者が訪れ、会場には家族連れや地域住民など幅広い世代が参加したことで、市民一人ひとりが地域社会の一員としてのつながりを実感できる機会となった。来場者からの拍手や声援により会場全体に一体感が生まれ、多文化交流への関心の高まりと地域コミュニティの結びつき強化という成果を得ることができた。

（課題と次年度の方針・取組）

- 雨天が予想される場合には、安全対策および防水対策の一層の強化が必要である。事前の天気予報を踏まえ、屋外スタンドや地面の防水補強を行うとともに、雨に弱いブースについては乾燥した場所への再配置を柔軟に検討する必要がある。
- 電気設備の管理体制については、使用電力の事前計算や電源供給のバランス調整を徹底し、専門担当者を明確に配置することで、トラブル発生時に迅速に対応できる体制の構築が求められる。
- 長時間にわたる出演者やスタッフの負担軽減のため、飲料水やスポーツドリンクの提供など、水分補給体制の事前整備を行い、熱中症や疲労の予防に配慮する必要がある。

| 合唱でハーモニーを奏でる | 多彩なファッションショー |
|---|---|
| | |
| 出店の様子 | 自国の文化を紹介するステージ発表 |
| | |

（事業名）

**総務広報・デジタル化・人財の可視化**

（目的）
広報のデジタル化を進め、自動翻訳機能を活用することで多言語化を図り、日本人市民だけでなく外国人市民にも必要な情報が届く環境を整える。また、紙媒体だけでは届きにくい若い世代や外国人住民に対しても、スマートフォンやインターネットを通じて情報発信を強化し、多文化共生への理解促進につなげることを目的とする。

（実施内容）
・広報誌の PDF 化およびデータ配信
・紙媒体による広報誌の発行（少数部数）
・SNS やホームページを活用した情報発信（自動翻訳機能）
・「みなくるカフェ」の試験的実施

（成果）
- 広報誌をデジタル化したことで、多言語への自動翻訳が可能となり、日本語以外の言語を使用する市民にも情報を届けやすくなった。また、印刷部数を抑えることができ、紙媒体に比べ低コストで継続的な情報発信が可能となった。
- さらに、SNS や FB(FACEBOOK)等を活用することで、イベントや講座情報を迅速に発信できるようになり、外国人市民からの問い合わせや参加につながった。
- 「みなくるカフェ」では、さまざまな国の食文化を通じて交流が生まれ、日本人市民と外国人市民が顔の見える関係つくりにつながった。

（課題・改善点）
- ホームページ（HP）のレイアウトや更新体制が十分ではなく、情報が見つけにくい部分や更新が遅れる部分があるため、誰でも見やすく利用しやすい構成への見直しが必要である。また、スマートフォン対応や多言語ページの整理も課題となっている。
- 人財の可視化については、「多文化市民図鑑」資料を発展的に構築し、外国人市民の特技や活動内容、地域で活躍する人材情報を発信する予定であったが、十分な整備や継続的な更新には至らなかった。今後は、地域活動やイベントと連携しながら、人財情報を蓄積・共有できる仕組みづくりが必要である。
- 「みなくるカフェ」は、出展者や参加者が主体的に企画・参加できる仕組みづくりや、継続的に実施できる運営体制の構築が今後の課題である。

## 多文化共生センター事業

### 事業経緯

本協会は 2024 年度から「甲賀市多文化共生センター」を拠点とし、外国人住民の増加に伴う多様な生活課題への対応と、地域社会における相互理解の促進による多文化共生社会の実現を目的として活動している。2025 年度は 2024 年度の 3 本柱（相談窓口、学習支援、日本語教室）をさらに一歩推し進め、「生活支援」「定住促進・雇用支援」「コミュニティ支援」「多文化防災」を4本柱に事業を展開した。

### 事業分野と主な事業

| 分野 | 主な事業 |
|---|---|
| 生活支援 | 一元的相談窓口、専門家相談、多言語情報提供 |
| 定住促進・雇用支援 | 就労相談、衣食住に関する支援 |
| コミュニティ支援 | 異文化交流イベント、日本語教室、放課後学習支援 |
| 多文化防災 | 防災訓練、防災啓発 |

各分野は相互に関連しながら機能しており、生活上の課題解決にとどまらず、地域住民との関係構築や社会参加の促進、防災意識の向上など、多面的な支援につながっている。
また、本センターは行政、地域団体、関係機関、外国人住民をつなぐ中間支援機能を担い、各主体との連携を通じて、地域全体で多文化共生を推進する体制づくりを行っている。

### 各分野の展開と成果、課題

（事業名）
生活支援
（実施内容）

| 項目 | 取組 | 実施内容 |
|---|---|---|
| 情報提供 | 多言語情報発信 | HP・チラシ等による情報提供 |
| 相談窓口の運営 | 一元的相談窓口 | 外国人住民の生活相談対応 |
| | 多文化共生に関する研修 | 4 泊 5 日の研修に参加 |
| | 相談窓口周知 | 地域のイベントなどでの周知 |
| 専門相談 | 法律相談 | 弁護士相談会の実施 |
| | 在留資格相談 | 在留資格の相談会実施 |
| 専門家 | 専門家による研修 | ファイナンシャルプラン研修実施 |
| 生活支援 | 生活オリエンテーション | オリエンテーション冊子の作成 |

（成果）

【情報提供：多言語情報発信】

- ホームページ閲覧数が 27,054 件に達し、外国人住民に対する情報発信基盤の強化が図られた。
- 多言語での情報提供により生活に必要な制度や手続きに関する情報へのアクセス向上につながった。

【相談窓口の運営：一元的相談窓口】

- 年間 263 件の相談に対応し、入管手続、雇用・労働、社会保険、医療、教育、日本語学習、住宅、福祉など多岐にわたり、外国人住民が抱える課題が複合的かつ多様であることを確認した。
- 多様な相談に対し、行政機関、教育機関、医療機関、福祉機関、専門家等と連携することで、個別の状況に応じた適切な支援へとつなげる体制を構築した。

【相談窓口の運営：多文化共生に関する研修】
- 多文化共生施策の現状および課題、生活相談、日本語教育、子ども支援、災害対応、医療・母子保健など、多文化共生に関する幅広い分野について体系的に理解を深めた。
- 他自治体の取組事例や実務に基づく講義を通じて、地域における多文化共生施策の具体的な展開方法に関する知見を習得した。

【相談窓口の運営：相談窓口周知】
- 地域イベント等において年間約 13 回の周知活動を実施し、多文化共生センターおよび相談窓口の認知向上につながった。

【専門相談：法律相談】
- 年間 5 回の弁護士相談会を実施し、延べ 30 名が参加したことで、専門的な法的課題への対応機会を提供した。

【専門相談：在留資格相談】
- 在留資格に関する相談会を 3 回実施し外国人住民の在留に関する不安や課題への対応機会を提供した。

【専門家：専門家による研修】
- ファイナンシャルプラン研修を 3 回実施し、延べ 27 名が参加したことで、金銭管理や生活設計に関する理解促進につながった。

【生活支援：生活オリエンテーション】
- 外国人住民向け生活オリエンテーション冊子（日本語版）の内容を完成させ、今後の情報提供基盤を整備した。

（課題と今後必要な取り組み）

| 課題 | 今後必要な取り組み |
|---|---|
| 相談体制の強化 | 相談件数の増加に伴い、安定的かつ継続的な相談体制の強化が必要であり、今後は人員配置や役割分担の見直しを検討する。 |
| 人材育成・研修体制 | 相談内容の多様化に対応するため、相談員の専門性向上および体系的な研修体制の整備、定期的な研修機会の確保が求められる。 |
| 相談業務のデジタル化 | 相談予約・管理のデジタル化が未実施であることから、今後は SIS の運用開始により業務効率化を図る必要がある。 |
| 専門相談の地域展開 | 専門相談が一部地域に限定されているため、今後は他地域への展開に向けた体制整備が必要である。 |
| 情報発信・周知 | 潜在的な支援対象者への情報発信を強化するため、周知手法の拡充を図る必要がある。 |
| 地域との相互理解 | 地域住民との相互理解を促進するため、交流機会や啓発活動の強化が必要である。 |

（事業名）
定住促進・雇用支援
（実施内容）

| 項目 | 取組 | 実施内容 |
|---|---|---|
| 雇用支援 | 就労相談 | 外国人受入れセミナー（商工労政課）及び JOB フェア（ハローワーク）への協力<br> |
| 衣食住に関する支援 | 衣食住支援 | 外国人住民へのアンケート調査を実施し、食材購入先や生活実態を把握、外国食材取扱店舗の整理 |

（成果）

【雇用支援】

- 外国人受入れセミナーおよび JOB フェアへの協力を通じて、企業と外国人材のマッチング機会の創出に寄与した。

【衣食住に関する支援】

- 外国人住民を対象としたアンケート調査を実施し、日常生活における食材購入先や生活実態を把握することができた。

（課題と今後必要な取り組み）

| 課題 | 今後必要な取り組み |
|---|---|
| 雇用支援 | セミナーやイベントへの協力にとどまり、継続的な就労支援体制や独自事業の構築には至っていないため、今後は関係機関との連携を強化し、外国人住民の安定的な就労につながる支援体制の整備が必要である。 |
| 衣食住に関する支援 | 生活実態に関するアンケート調査および情報整理は実施したものの、調査結果を具体的な支援施策へ反映する段階には至っておらず、今後はデータの分析・活用を進め、実効性のある生活支援につなげる必要がある。 |

（事業名）

コミュニティ支援

（実施内容：異文化理解）

| 項目 | 取組 | 実施内容 |
|---|---|---|
| 異文化理解 | 国フェスとの連携 | ・フィリピン料理教室<br>・ベトナム料理教室<br>・防災食づくり |
| | 綾野地区における<br>各国の料理と文化体験 | ・みなくるワイワイフェスタ「ベトナム春巻き」料理教室実施<br>・ちらし寿司料理教室実施 |
| | 地域住民と外国人住民<br>の交流促進 | ・みなくるワイワイフェスタの開催<br>・みなくちアルプラザ太陽の広場<br>「多文化共生」イベント<br>・トヨタ紡織イベント<br>・ベトナム中秋節<br>・はればれ会：ベトナム講座 |

（成果）

【国フェスとの連携】

- フィリピン料理教室、ベトナム料理教室、防災食づくりを通じて、料理を媒介とした異文化理解の機会を創出し、延べ 37 名が参加した。

【綾野地区における各国の料理と文化体験】

- 綾野地区の外国人住民構成（特にベトナム）を踏まえた講座・料理体験を実施し、地域特性に即した異文化理解の機会を創出することができた

【地域住民と外国人住民の交流促進】

- 企業イベント等も含め、多様な場面で交流機会を創出することにより、地域・企業・外国人住民の接点形成に寄与した。

【他地域への展開（泉区：はればれ会）】

- 泉地区の高齢者団体「はればれ会」と連携し、ベトナム文化紹介講座を実施することで、これまで外人住民との接点が少なかった高齢者層に対する異文化理解の機会を創出することができた。

- 国際教育チームが地域へ直接出向くアウトリーチ型事業として、協会活動の地域浸透および多文化共生の裾野拡大に寄与した。

**（課題と今後必要な取り組み）**

| 課題 | 今後必要な取り組み |
|---|---|
| 企画と実施体制の分離 | 料理販売・紹介といったイベント的取組は実施できた一方で、「やさしい日本語カフェ」のような継続的かつ目的志向型のプログラムについては、企画段階から運営体制の構築まで一貫した設計が不十分であったため、実施に結びつける必要がある。 |
| 人員体制の確保 | カフェ形式での交流事業には、進行役やファシリテーター等の役割が必要であるが、対応できる人材の確保・配置が不十分であったため、今後は役割分担を明確にした運営体制の整備が必要である。 |
| プログラム設計の明確化 | 単なる交流の場にとどまらず、「やさしい日本語の実践」という目的に沿った内容設計や進行方法の具体化が不足していたため、目的・内容・進め方を体系的に整理する必要がある。 |
| 継続実施に向けた仕組みづくり | 単発イベントとしての実施にとどまらず、定期開催を前提としたスケジュール設定や参加者募集の仕組みづくりが必要である。 |

**（実施内容：日本語支援）**

| 項目 | 取組 | | 実施内容 |
|---|---|---|---|
| 日本語支援 | 対面教室 | こうか日本語教室入門 | 「いろどり～生活の日本語～入門」「くらしの日本語 in 滋賀」を用いた日本語ゼロ初級者対象の日本語教室を実施、<br>延べ 341 名が参加した。<br>前期:4 月～6 月(3 時間×10 回)<br>後期:9 月～11 月(1.5 時間×20 回)<br>冬期:1 月～3 月(1.5 時間×20 回)<br> |
| | | こうか日本語教室初級 | 「いろどり～生活の日本語～初級1」「くらしの日本語 in 滋賀」を用いた日本語初級者対象の日本語教室を実施、延べ 234 名が参加した。<br>前期:4 月～6 月(3 時間×10 回)<br>後期:9 月～11 月(3 時間×10 回)<br>冬期:1 月～3 月(1.5 時間×20 回) |
| | オンライン教室 | | 「いろどり～生活の日本語～入門及び初級1」「くらしの日本語 in 滋賀」を用いた日本語ゼロ初級者及び初級者対象の日本語教室を実施、延べ 45 名が参加した。<br>入門:8 月～10 月(3 時間×10 回)<br>初級:1 月～3 月(3 時間×10 回) |
| | 甲賀市日本語教師の募集 | | 広報 4 月号への募集記事掲載及び既存の日本語ボランティアや相談窓口に来られた日本語有資格者を対象に甲賀市日本語教師登録を勧め、新たに 5 名の登録があった。 |
| | 日本語ボランティアスキルアップ講座 | | 外国語学習体験を通した学習者心理の理解や日本語教育の参照枠の理念について学ぶ研修を実施し、日本語ボランティア、甲賀市日本語教師、新規日本語ボランティア募集講座参加者等、<br>21 名が参加した。<br> |
| | 新規日本語ボランティア募集講座 | | 日本語学習支援の目的・魅力、支援者の心得、傾聴とやさしい日本語、日本語の構造、Cando に注目する、学習ニーズに合わせた支援について学ぶ研修を実施し、21 名が参加した。 |
| | 日本語講師養成制度 | | 日本語教育能力検定試験等合格者2名に対し、受験費用を補助した。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 既存教室の実態調査 | こうか日本語教室受講者アンケート | 学習者の属性や満足度、学習が活かされた場面やこれから学びたい内容、教室のアクセスのし易さ等を問うアンケートを実施し、37 件の回答を得た。 |
| | | 虹・にんじゃ教室受講者アンケート | 学習者の属性や学習の目的、教室の満足度や課題等を問うアンケートを実施し、20 件の回答を得た。 |
| | 日本語ネットワーク会議 | | 虹・にんじゃのスタッフ、市、協会が参加し、市の日本語教育の方向性を確認するとともに、学習者からの参加費の見直し等について検討した。 |

**（成果）**

- 学習希望日が週末に集中するなか、こうか日本語教室の実施により、より充実した日本語学習機会を提供することができた。
- 受講後アンケートでは、教室で学んだことが就学、就職、あるいは様々な生活の場面（通院や買い物、友人関係、職場や地域でのコミュニケーション）で生かされたとの感想が寄せられた。
- 甲賀市日本語教師登録者の増加により、学習者と教師双方にとって無理のないスケジュール設定が可能となった。

**（課題と今後必要な取り組み）**

| 課題 | 今後必要な取り組み |
|---|---|
| 学習者の定着 | いずれの教室においても学習者の定着が課題となっており、引き続き学習者ニーズを確認しながら、学びを継続しやすい環境を整えていく必要がある。 |
| 甲賀市日本語教師の確保 | 企業型日本語教室を実現させるためには、甲賀市日本語教師登録者を拡大する必要がある。 |

**（実施内容：こども学習支援）**

| 項目 | 取組 | 実施内容 |
|---|---|---|
| こども学習支援 | なないろ教室 | 外国にルーツを持つ児童を対象に、学習習慣を身に着けることを目的とした宿題支援を実施、延べ628人が参加した。 |
| | なないろ教室スタッフミーティング | 情報共有、課題解決に向けた取り組みや教室の方向性、運営体制について検討した。 |
| | 新規放課後学習支援者募集講座 | 外国にルーツを持つ児童の課題、やさしい日本語、教科指導を通した日本語指導、支援者の心得等について学べる動画を作成し、延べ 17 人が視聴した。 |
| | 放課後学習支援者スキルアップ研修 | 外国にルーツを持つ児童の心理や学習上の課題、教室の目的と役割、傾聴、ボランティアにできることとできないこと等について学び、9 人が参加した。 |
| | 伴谷地域での地域学習交流会実施サポート | レクリエーション担当講師の選定と調整及び当日の運営を補助した。 |
| | 多言語読み聞かせ | 外国にルーツを持つ児童を対象に、アイデンティティの確立を目的として、児童の母語に合わせた読み聞かせを実施、6 人の児童が参加した。 |
| | 超過年齢への高校進学支援 | 日本語を学びながら高校卒業資格を取得できる学校を紹介した。 |
| | 小学校プレスクール | 外国にルーツを持つ家庭を対象に、日本語のあいさつ、名前の読み書き、先生の指示、学校に持って来ていいものと持って来てはいけないもの、給食、交通ルール等を学び、延べ 5 家庭が参加した。 |

| | | |
|---|---|---|
| | ラウンドテーブルの開催 | 学校教育課、市、有識者、初期指導教室室長、外国人相談員等が参加し、「甲賀市外国人児童・生徒受入れの手引き」ならびに「日本語指導ガイドライン」の検討、情報交換を行った。 |

**（成果）**

- 当初は椅子に座っていることも難しかった児童たちが、教室に来ると自発的に連絡帳を確認し、宿題に取り組めるようになった。
- 学校では日本人児童に囲まれて委縮している児童にとって、なないろ教室はありのままを出せる居場所であり、同じように外国にルーツを持つ仲間に出会える場ともなった。

**（課題と今後必要な取り組み）**

| 課題 | 今後必要な取り組み |
|---|---|
| ボランティアの確保 | マンツーマンの対応が必要な児童が多いため伴走支援ができるボランティアを獲得する必要がある。 |

**（事業名）**

**多文化防災**

**（実施内容）**

| 項目 | 取組 | 実施内容 |
|---|---|---|
| 防災訓練の実施 | 外国人防災リーダーの育成 | 外国人キーパーソンを対象に、甲賀市の災害と防災対策、災害ボランティアセンターや消防団、リーダーの役割、通訳・翻訳スキル等を学び、神戸市の「人と防災未来センター」を見学。延べ 32 人が参加し、14 人が甲賀市外国人防災リーダーに登録した。 |
| | 多言語対応の防災訓練 | 甲賀市総合防災訓練やまちづくりフェスにて外国人防災リーダーの紹介や参加者との防災クイズを実施、延べ 17 人の外国人防災リーダーが参加した。 |
| ピクトグラムの導入 | 住民への啓発活動 | 言葉の壁を越えて情報を伝える手段として防災ピクトグラムに関するクイズを実施、延べ 121 人が参加した。 |
| 国際教育を活用した防災啓発 | 防災食教室 | 地域の防災士を講師に招き、ハイゼックスを用いた蒸しパン作りを実施、13 人が参加した。 |

**（成果）**

- 研修を修了した 14 名が甲賀市外国人防災リーダーに登録した。
- クイズ形式でピクトグラムを普及したことにより、多様な国籍、世代の人々が楽しく学ぶことができた。

**（課題と今後必要な取り組み）**

| 課題 | 今後必要な取り組み |
|---|---|
| 研修内容の見直し | 翻訳・通訳以外の分野で活躍したい外国人防災リーダーにも配慮した研修内容とする必要がある。 |

**全体総括**

本事業は、多文化共生センターの 4 本柱（生活支援、定住促進・雇用支援、コミュニティ支援、多文化防災）に基づき実施し、全体として概ね計画に沿った事業運営を行うことができた。

生活支援分野においては、一元的相談窓口の運営や多言語情報提供を通じて、在留資格、生活困窮、日本語学習、各種手続き等、多岐にわたる相談に対応し、外国人住民の生活基盤の安定に一定の成果を上げた。また、コミュニティ支援分野においては、異文化交流、日本語教室、放課後学習支援等を継続的に実施し、外国人住民と地域との接点創出および相互理解の促進に寄与した。

一方で、定住促進・雇用支援分野においては、体制整備および関係機関との調整に時間を要し、事業展開が限定的となるなど、分野間で取組の進捗に差が見られた。今後は、本年度の実績および課題を踏まえ、各分野における役割分担の明確化、実施体制の強化および事業計画の精度向上を図り、より効果的かつ計画的な多文化共生施策の推進に努める。

## ❖ EGAOCONSULTING による支援実績と貢献

2025 年度は、多文化共生センター事業の拡大に伴い、事業推進体制および運営基盤の強化が求められる年度となった。

そのような中、EGAOCONSULTING は、多文化共生センター事業である

- 生活支援分野
- 定住促進・雇用支援分野
- 異文化理解を含むコミュニティ支援分野

においては、企画調整、関係機関連携、実施運営等について専門家としての知見を提供し、基盤づくり、仕組み作りをおこない、事業推進に寄与した。

また、本年度は、事業規模拡大に対する運営体制整備や人材育成が継続的な課題となっており、今後は、本年度構築・整理した運営体制や仕組みを協会内部へ段階的に定着させ、協会自らが主体的かつ継続的に事業運営を担える体制づくりを進めていくことが必要である。

**法人運営会議等**

| 日程 | 事業名 | 参加者等 |
|---|---|---|
| 2025 年 5 月 13 日 | 第1回理事会 | 理事 8 人、監事 2 人、市 3 人 |
| 5 月 18 日 | 第4期定期総会 | 181/269（個人 54、法人 2、委任状 125） |
| 6 月 17 日 | 第1回リーダー会議 | リーダー7 人 |
| 8月 5 日 | 第2回リーダー会議 | リーダー7 人 |
| 10 月 8 日 | 第2回理事会 | 理事 6 人、監事 2 人 |
| 11 月 18 日 | 第3回理事会 | 理事 6 人、監事 2 人 |
| 2026 年 1 月 31 日 | 第4回理事会 | 理事 6 人、監事 2 人 |
| 2月 22 日 | 第3回リーダー会議 | リーダー7 人 |
| 3 月 27 日 | 第5回理事会 | 理事 7 人、監事 2 人 |